

津波忌 (一)

松浦敬親

これから三回に分けて、新季語「津波忌」について書きます。津波忌は、「東日本大震災忌」（三月十一日）の副季語として、私が提唱したものです。

前回のこの論壇で、西をさむ氏は、「今では新聞に被災者数すら載っていません。国民の九十%以上が、そう言えばそんな事があったなあぐらいにしか思っていません。未だ三年も経っていないのにこの有様です」と書いています。従って、西氏は東日本大震災に関心を持ち続けておられるのでしょうか。

西氏は更にラインを取り上げ、こう書いています。「しかし、蜘蛛の網に掛かった昆虫の様に、縦横に張り巡らされたこのラインに人間と言う動物が引っ掛かってしまった様です。確かに便利です。ペンも紙も要りません。でも何かが漏れて居ませんか。私達の周りに在り見えない物です。そう、時間です。時は全てに平等で、淀みなく流れています。考えて見て下さい。春夏秋冬と廻って来て初めて一年が経つのです。時の流れを見失わないでください。時間を捨てると言う事は、人生を捨てる事と一緒に」と。

私は故あって携帯電話も持たない人間なので、ラインについてはよく知りません。しかし、道具は使い方次第なので、ラインを使うことが「時間を捨てる」ことになるというのは言い過ぎだと思います。

西氏は続けて、「その点、私達には俳句が有ります。是によって記憶を留めておく事が出来ます」と書き、俳句を持ち上げています。俳句をやっても「時間を捨てる」人はたくさん居るので、これも我田引水でしょうね。

その証拠に、西氏は続けて、「しかし、年間に一千万以上の句が詠まれていると思われませんが、果して幾つ残るでしょうか」と書いています。残ると言う視点に立つと、大多数は「時間を捨てる」結果になるのです。

西氏は最後に、「思うに、俳句界は現在、迷宮界に嵌っています。では如何にすれば此処から抜け出せるのでしょうか。簡単です。時計の針を巻き戻して、発句の出発点に帰れば解決します。人生、弥次喜多道中と行きませんか」と書いています。安直な結論で、いささか困惑しました。書き出しの東日本大震災は何処へ行ったのでしょうか？

勿論、発句の出発点の一つには滑稽があります。だから、東日本大震災の中にもそういう部分を見つけない、という結論なら、私も大いに納得したでしょう。しかし、「弥次喜多道中」では論点がそれです。

私は、実作者として必要だから「津波忌」を提唱しました。この季語には、追悼や鎮魂だけでなく、実存的な不安や滑稽をも表現する力があります。その辺は、次回で。

津波忌やビルほどの鮫夢に出て 敬親